HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	石橋湛山内閣の成立 ： 総裁選選出の要因を探る
著者	髙嶋，熙和；TAKASHIMA，Terukazu
引用	北海学園大学人文論集(69)：164(六三)-137(九〇)
発行日	2020-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

石橋湛山内閣の成立
――総裁選選出の要因を探る

高嶋熙和

はじめに

本稿の目的は、石橋湛山内閣成立の歴史的意義を、石橋が一九五六年一二月に行われた第二回自由民主党総裁選挙において最有力候補であった岸信介を破り、総裁に選出された要因とその背景を探ることで、明らかにしようとするものである。

石橋湛山は、周知のとおり、「小日本主義」によって日本帝国主義に異を唱えた少壮気鋭のジャーナリスト・自由主義者として、戦後民主主義の源流を探ろうとする松尾尊兌ら第二次世界大戦後の歴史学界において注目を集めた人物である。しかしそれゆえに、松尾らの研究では、戦後歴史学が講座派以来の史的唯物論の強い影響下にあったこともあり、満州事変以降、体制に迎合的ともみえる石橋の言動が「転向」「変節」としてことさら問題とされ、保守政治家に転身した戦後について一顧だにされることはなかった(1)。一九八〇年代後半以降、こうした研究状況を克服すべく、戦中・戦後を含めた石橋の全体像を構築し、その事績を再評価しようとする研究成果が相次いで公にされたものの(2)、そもそも本人の病気により、わずか二カ月あまりで総辞職に至ったその内閣についてはほとんど関心が払われることはなかったので

ある。

このような研究史のなかで唯一の例外が筒井清忠の『石橋湛山――自由主義政治家の軌跡――』（中央公論社、一九八七年）である。筒井の研究は、その冒頭に「戦後政界の中で理想主義的リベラリスト石橋湛山はいかに戦い、いかにして最高権力に到達し、そして退いていったかを明らかにするのが本書の目的である」とあるように、公職追放解除による政界復帰後から内閣総辞職にいたるまでの石橋の行動や言動、周辺人物の対応や評価などを詳細に分析している。そこでは、当初、総裁選候補者の圏外にいた石橋が、緒方竹虎・三木武吉といった重鎮の相次ぐ死去という思いがけない事態によって党内での離合集散が進んだ結果、総裁選候補者として急浮上したことが関係者の日記や新聞・雑誌の評論など広範な資料によつて克明に描き出されており、筆者も本稿の作成過程で多くを参考とさせていただいた。だが、この筒井の研究も石橋が総裁選挙で勝利した要因自体については明らかにしていない。

しかしながら、石橋内閣の成立は、本来政権与党の総裁になるはずもなかった人物が、それも可視化されたルールに則った選挙を通じて選出されるという日本の憲政史上、きわめて異例な事態によって可能になったものにほかならない。すなわち、石橋・岸・石井光次郎の総裁選候補者のうち、石橋は最高齢ですでに七〇歳を超え、その派閥も、保守合同前からそれぞれ民主党・自由党の幹事長として大派閥を率いていた岸や石井と比ぶべくもない、わずか二〇人程度の弱小勢力に過ぎなかった。前者に関しては、石橋が日本国憲法下の内閣総理大臣としては就任時最高齢であったことや内閣総辞職の理由が本人の老人性急性肺炎によるものであったことからも、それが不利に働くのは容易に想像がつくであろうし、後者にいたっては数の論理が支配する選挙において致命的であるはずであった。

しかも、鳩山一郎と共に保守合同を主導し、早くから次期総裁の最有力候補と目されていた岸には、そのフィクサーであった矢次一夫が「あの選挙では大臣のポストの手形濫発はもちろんであったし、多額のカネも動いた。総裁選挙でカネが動いたのはあの時からだ。勢いのある政治家にカネが集まるのは当たり前の話だ」[3]と指摘しているように、大臣

ポストの約束とその集金力とによって多数派工作や対立陣営の切り崩しが可能であった。これに対して石橋は、総裁選わずか三カ月前の新聞の下馬評においてさえ、第一位の岸と第五位の石井に対し、ようやく八番手にその名が挙げられていたに過ぎない[4]。要するに、石橋は他の候補者に勝る有利な条件を何ら保持していなかったようにみえるのである。

さらには、この自民党総裁選が事実上、すでに保守合同前から首相の地位にあった鳩山の信任投票にほかならなかった第一回選挙を除けば、五五年体制の下で政権与党が総裁を選出した初の選挙であったとともに、その後も含めて党人派にも官僚系にも属さない傍流を選出した唯一の選挙であったことも忘れてはならない。しかも石橋内閣は、日本の外交・安全保障政策を考えた場合、かねてより日中国交正常化を念頭に対中貿易の拡大を主張してきた人物の内閣であるという意味で、吉田茂内閣のアメリカ中心外交を転換し、日ソ共同宣言を成立させた鳩山内閣とともに戦後政治史の転換点に位置するものであった。石橋の後を継いだ岸が、アメリカの防衛義務を定めた日米安全保障条約の改定を実現させ、現在に至るまでの日米安保体制と自民党長期政権の礎を築いたことを想起すれば、石橋の総裁選出の要因解明は、その岸がなぜ敗北したのかという問題とともに、日本の戦後政治史を研究する上で避けて通ることのできない重要な課題なのである。

本稿は、以上のような問題関心と基本的視座に立ち、石橋の総裁選出の要因とその背景を可能な限り析出することに課題を置く。もとより、自民党総裁選挙は衆参両院における首班指名の記名投票と異なり、無記名投票であるため、投票者個人の投票行動の結果を知ることは、不可能なことである。したがって、先行研究と同様に周辺の状況証拠から推論を積み重ねての手法を採らざるを得ない。

したがって本稿は、次のような構成で論を進めていく。まず、石橋が宰相候補と目されるようになる、保守合同前における石橋の日本民主党内における位置づけを行う。ついで、保守合同後に「鳩山後」を担うべき候補として名の上がった幾人かの人物と石橋とのかかわり、両者の力関係の相対的な変化を検証することで、総裁選候補者が絞られていった

（一六五）

過程を跡づける。さらに、総裁選における岸と石井との対立の場において、石橋がどのような言動や行動をとったかを検証する。最終的には、これらの作業を通じ、石橋が自民党総裁に選出された要因とその背景を析出することで論をまとめたい。

なお、本稿では、石橋湛一・伊藤隆編『石橋湛山日記』下（みすず書房、二〇〇一年）と『東洋経済新報』の引用にあたっては、煩瑣を避けるため、それぞれ『日記』『新報』と略記し、とくに必要とするものを除き註記しないこととする。

第一章　鳩山内閣成立から保守合同まで

一九五四年一二月八日吉田茂は政権から退くことを表明した。この日の石橋の『日記』には「九時半鳩山邸にて最高委員会。社会党は早期解散を条件とす」と、翌九日には「国会において首班指名選挙。夕刻まで両社会党と協議、漸く鳩山氏に一致して本会議を開く」とある。首班指名では野党社会党は鳩山一郎を支持することと早期解散することで意見の一致をみたことが記されている。

首班指名の結果は事前の約束通り両社会党が鳩山に票を投じて、日本民主党鳩山二五七票、自由党緒方竹虎一九一票となり第一次鳩山内閣が成立した。鳩山は組閣参謀を三木武吉、岸信介、重光葵、松村謙三、大麻唯男、石橋湛山、河野一郎などであったと記録している(5)。石橋は吉田内閣大蔵大臣としての不評を払拭すべく捲土重来を期していたはずであるが出鼻を挫かれることになった。吉田内閣を退陣させておよそ一〇年来の念願であった鳩山内閣成立に大きく貢献したと自負する石橋は、この内閣で大蔵大臣になることを当然視していた。

しかし、鳩山が大蔵大臣に指名したのは吉田内閣時に日本銀行総裁で非国会議員の一万田尚登であった。鳩山の組閣

当日の『読売新聞』夕刊[6]に、石橋が一万田氏の入閣に最後まで難色を示した為に組閣が遅れたとの記事がある。当日の『日記』には「一万田日銀総裁を大蔵大臣に任命することに対し私より強硬に反対、ただし最後には承認」と記されており、新聞記事が事実であることを示している。鳩山が石橋を大蔵大臣に指名しなかったことの真相は不明であるが、「石橋のインフレ説には、財界をはじめとして危惧する向きが少なくなかった」ことに加え、「三木氏らが一万田蔵相を推したのは、民主党と縁の薄い財界に安心感を与えようとしたため、すなわち日銀総裁であった一万田氏の集金能力を期待したためというのが、もっぱらの評価である[7]」と言われている。石橋が抵抗したのは、鳩山が記録しているように、彼が鳩山内閣の組閣参謀として閣僚人事に意見を述べる立場にあったからである。

しかし、側近の石田博英はこの時の石橋について「鳩山政権の中で孤立していた[8]」と証言している。筒井清忠はこのことについて、「鳩山以後を考えて石橋を財界とのパイプの強い大蔵のポストからはずそうとしたのだと考えることも可能であろう。（中略）鳩山自由党から復党時に生じた亀裂から三木と石橋の間には埋め難い心理的溝が生じていたのである」として、三木とのしこりが将来のことも含めてこの時に噴出したのが、石橋を通商産業大臣に就任させる結論に至ったものと見ている[9]。結局石橋は通産相就任を受諾し、鳩山が首相を引退するまでその座に留まることとなった。後の事を考えると、石橋にとって鳩山内閣の閣僚時代は雌伏の時であったが、首相への階梯を静かに登っていたことになった。

鳩山は前述のように野党社会党との事前約束に従って、翌年一月二四日衆議院を解散する。吉田政権末期には保全経済会献金事件、造船疑獄などの不祥事が続いたのも追い風となって政権を獲得した鳩山は、所謂鳩山ブームに乗って投票日を迎えようとしていた。これについて一月二〇日の『朝日新聞』夕刊に「鳩山ブームの実態」と題する記事が掲載されている。同紙の世論調査では「民主党ブームとか鳩山ブームとか呼ばれるものが相変わらず続いている」としながらも次のような辛口の分析をしている。

（六七）

鳩山個人に対する親近感や好感からの民主党内閣支持は、わずかに三パーセントあとは「吉田内閣よりよいから」というのが断然多く、「人心一新」「新鮮味」などがこれに次ぐ。つまり民主党ブームの正体は吉田内閣や吉田首相個人に対する不満や不人気の波にうまく乗ったものということだ。

表1　第27回衆議院議員総選挙結果

党　派　名	改選前	立候補数	改選後	増減
日本民主党	124	286	185	61
自由党	180	248	112	▲68
日本社会党（右派）	61	122	67	6
日本社会党（左派）	74	121	89	15
労働者農民党	5	16	4	▲ 1
日本共産党	1	60	2	1
諸派	1	37	2	1
無所属	10	127	6	▲ 4
欠員	11			▲11
合　　計	467	1,017	467	0

典拠：衆議院事務局「第27回衆議院議員総選挙一覧」

こうして行われた第二七回衆議院議員総選挙結果は表1のとおりである。鳩山ブームに乗った民主党は、改選前よりも勢力を伸張させて第一党となったが少数与党を脱することはかなわなかった。鳩山は首班指名で自由党の同調もあって首相に選出されたが、社会党は左派の鈴木茂三郎に投票した。更に石橋の『日記』には「議長副議長は自由党と社会党との陰謀により益谷秀次及び右社〔杉山元治郎〕に帰す」とある。与党民主党が推した三木が落選し、不安定な政権運営が懸念される結果となり、政局が年末の保守合同に向けて大きく動いてゆくことになった。当時の民主党幹事長は岸、総務会長三木、政務調査会長松村で石橋や芦田均は最高委員であった。三木と岸が中心となって保守合同に動き自由党の緒方竹虎も賛成の方向であった。これに対して旧改進党の松村や三木武夫、自由党の吉田などは反対であった。年末に向けての動きについては周知のことであるので、以後は鳩山後と目された人物達を

追うことに主眼を置くこととする。

自由党時代から石橋は岸、芦田、金光庸夫とともにいくつかの保守新党結党を目指すグループの一つとして新党四人組とも称され全国遊説を行うなど、彼らが吉田退陣、鳩山政権樹立の主翼を担った[10]。金光はこの選挙で落選し翌月には死去したことから、石橋、岸、芦田の三人が民主党内での主力メンバーとなった。岸は党幹事長、芦田は引き続き党最高委員となり、石橋は閣僚となって党務から外れるかたちとなった。この年五月七日に岸は保守結集と民主党解党に関する幹事長談話を発表する。当日の『朝日新聞』夕刊の一面トップは「保守結集で岸談話発表」と報じているが、この記事で岸は、鳩山や党役員から事前に了解を得たことを述べている。他の中央紙も同様の記事を掲載している。この発表は、各紙が当日の朝刊で発表予定を報じていることからも、事前にその内容が記者達にリークされていたことになる。保守合同に関して、民主党内は要としての岸を中心として回っていることが強く印象づけられる。『日記』では欄外に「本日、岸幹事長談話発表」の記入があるのみである。同月二七日には岸、三木、石井光次郎自由党幹事長、大野伴睦の四者会談が行われ、六月四日には鳩山と緒方との党首会談で「保守結集の原則意見一致」を発表し、一〇月の自由民主党結成への動きが本格化することになったが、『日記』には議会と通産省関連の記載のみである。党務である保守合同からは距離をおいた立場になったからであろうか。民主党発足後、岸は党内外の課題対処を合理的にこなしていたとされる。岸は、かって所属した自由党との保守合同にむけた話し合いの主役の位置を不動にしていた。この時点で石橋は鳩山後について岸におくれをとっていることが明らかである。ただ、石橋が鳩山後をどこまで自己の課題として捉えていたかは不明でもある。

通産相就任直後の『読売新聞』[11]は「除名大臣と脱党政務次官を迎えた通産省は極めて明るく意気盛んである」ではじまり、「石橋大臣、山本（勝市）政務次官を擁してわれわれかねての持論である拡大均衡を実践するのだ（某局長談）」と期待と意気込みが伝わってくるものとなっている。「人事には興味はないが、不当な政治立ち入り、利権介入は許さな

（六九）

い」とする石橋に対して、「利用するにはたのもしい大臣」と、石橋の姿勢の一端や省内の見方を端的に伝えている。

戦後日本の高度経済成長が通産省主導による産業政策を通して達成された点を指摘したチャーマーズ・ジョンソンは、石橋の通産大臣就任によってそれまで政治的に無名無力のポストであった通産大臣が大蔵大臣、外務大臣とともに総理大臣になるための不可欠のポストとなったと石橋に注目している[12]。更に、石橋は持論の拡大均衡政策を通産行政で推進しようとしたとして、それまでの経済計画担当者が見落としていた日本自体が巨大な市場であり、輸出だけでなく国内販売もともに拡大すべきことを主張したと述べている。当時の通産省は重要産業を鉄鋼と機械、エネルギー産業としての石炭としていたが「鳩山内閣の主要閣僚として経済政策の立案に大きな影響力をもった石橋湛山が、戦前以来の自由主義的な経済論者であったことも影響していた[13]」と解説されているように、具体策に関する与党の政策的な介入の度合いが小さくなっていた。たとえば、新規産業育成策の一環であった石油化学工業の振興に関しては、四日市、岩国、徳山にあった旧海軍燃料施設用の土地を辻政信や保科善四郎などの旧軍関係者の反対を押し切って、できたばかりの石油化学会社に払い下げたが[14]これが後に民間企業による石油コンビナートとして高度経済成長の大きな牽引役となったことは広く知られているとおりである。すなわち、今日の視点から見れば、石橋の経済政策は技術立国をめざす当時の日本にとって経済発展のための基盤を創ったと評価できる。石橋はエコノミストの本領を発揮し、政治家としての実績を挙げることになったのである。

ただし、前内閣から未解決のままであった電気料金値下げ問題を「電灯料金三割頭打ち制」で解決にこぎつけたが、現行料金とほとんど変わらないとして「主婦連は強い不満」と報じられたり[15]「肥料値下げ問題や砂糖法案では河野農相に点を稼がせている[16]」ことなど、国民生活に直結するような問題にはやや目配りが足りないところもあったと言わざるを得ない。

以上、第一次及び第二次鳩山内閣通産大臣としての実績を見てきたが、在任中に限れば、総じて目立った成果を上げ

ることも致命的な失策もなかったことになる。さりながら、筆者は高度成長のけん引役となった通産行政を束ねて、その方向性を誤ることなく民間企業の成長・発展を促進させる環境整備を着実に実施したことを通産大臣石橋の功績として認めてしかるべきと考えるのである。

保守合同問題に戻るが、八月に鳩山は防衛分担金についての自己の考え方を米国首脳部に納得させるとして、重光葵外相とともに余剰農産物の交渉などで訪米予定であった農相河野を一緒に行動させることを決めるが、その際河野が「幹事長の岸君もつれて行った方がよいといい出し結局その通りになった」ことを明らかにしている。これについて「河野君にすれば、自分がいない間に、事態が急進展するようなことになってはと心配し、その火元の岸君も同行させてしまった方がよいと考えたためかも知れない」と河野が岸の動きに神経をとがらせていたことを見ていただけでなく、この訪米を機会に「岸、河野両君の握手」と両者の関係が構築されたことも見ている。(17)

河野は石橋と同じ早稲田大学を卒業し一九二三年朝日新聞社に入社した。一九三一年犬飼毅内閣農林大臣山本悌二郎の秘書官となって政界入りし、翌年の第一八回総選挙に当選する。さらに一九三六年の第一九回総選挙では買収容疑で逮捕され獄中当選する。(18) 立憲政友会時代は総裁候補として鳩山を押し立てるなど、鳩山との関係は戦前にさかのぼる。戦後は自由党幹事長として鳩山内閣成立に奔走したが、一九四六年五月に鳩山が、翌月には自身も公職追放となり、活躍の場は石橋同様一九五一年の公職追放解除を待つことになった。追放解除後鳩山や三木、石橋らと同様自由党に復帰して反吉田の急先鋒となる。翌年総選挙の最中に石橋と共に除名処分を受けて両者の結びつきは強まることになった。しかし、その後石橋が自由党に復帰した時を契機として、三木と共に石橋とは距離をおくこととなった。民主党の結成、そして鳩山内閣成立では同じ道を歩んだが、まさに呉越同舟であった。河野は鳩山内閣で終始農林大臣を歴任したが、自由・民主・自民のいずれの党においても、最若年でありながら政治家経験では石橋をはじめとして多くの主要幹部を凌駕しており、石橋の所掌に関わる事項にまで踏み込む政治力を発揮したのである。こうした河野の行動を見ると、時

（七一）

に自己の主張を貫く一本気なところがある一方、戦前からの経験のなせる業か常に自己を政局の中心に置くという優れた政治手腕を持ち合わせたプロの政治家ということになる。当初は鳩山を押し立てていたが政局の焦点が鳩山後に移ると、政治家としては傍流に位置する石橋ではなく本流に位置する岸に接近し総裁選で岸を支持する。その後も、安保条約改訂までは、岸内閣の閣僚や党役員を歴任するなど岸との協調行動を続けた。

首相経験者である芦田は党重鎮として存在していたが、いかんせん昭電事件の裁判が継続中であり、鳩山後から外れることは致し方ないところであった。また旧改進党から民主党に合流した重光と松村は、ともに第一次鳩山内閣の組閣参謀となり、前者は副総裁・外務大臣として鳩山を支え、後者は政調会長、その後第二次鳩山内閣で文部大臣となったが、その党内勢力からおのずと鳩山後を担うとは見られなかった。

これまで、鳩山後のレースに参加する可能性があった人物達について石橋を中心として見てきた。民主党においては、岸が一頭地を抜き、彼を支えた河野がこれに続いた。石橋は民主党政権発足時の出だしでつまずき、その後も幹事長として党務を切り回した岸や、農林大臣としてすでに対ソ交渉に大きな業績を挙げつつあった河野を上回る成果を収めることなく保守合同へ向かうこととなった。

第二章　保守合同後から総裁選まで

一九五五年一〇月日本社会党は右派と左派が合流する。このこともあって翌月政府与党の鳩山一郎民主党と野党の緒方竹虎自由党、松村謙三・三木武夫の改進党との保守勢力が自由民主党を結成する。翌年四月には第一回自民党総裁選挙が予定されていた。二大勢力の民主党と自由党いずれの党首が代表となるかが問題となるのは理の当然である。すなわち、結党前から鳩山と緒方との権力闘争が始まっていたことになる。

ところが、年が明けた一月、緒方が急死する。この結果、懸案は急遽決着をみて鳩山が代表に選出されることとなった。しかし、そうなれば当然、鳩山後は誰かの問題が浮上してくる。石橋は二月七日の『日記』で「総裁問題、初代は鳩山とほとんど決定、二代目につき動き盛んなり、私のところにも種々の相談やら忠告やら持ち込まる」と記しており、党内は既に鳩山選出を織り込んでおり、鳩山後の動きが始まっていたことが明らかとなっている。この時点で鳩山後に名前があがっていた人物としては、旧民主党系では岸信介、石橋湛山、重光葵、正力松太郎、芦田均、河野一郎。旧自由党系では大野伴睦、石井光次郎となるが、旧自由党系は筒井清忠が強いて探せばとの前置き付きで挙げているように[19]、両者は他の有力候補者と互角かそれ以上とは言えなかった。筒井の言によれば岸が先頭、遅れて石橋であるが鳩山の終わりの時機が確としていないことを考慮すれば、この両者についても強いて挙げればの域を出るものではなかったことになる。

この年の四月五日、事実上鳩山の信任投票となる第一回自民党総裁選が実施された。鳩山が三九四票を獲得して選挙前の予想通り総裁に選出された。しかし、この選挙では白票が七六票もあった。また、岸四票、石橋二票、石井二票など鳩山以外の一〇名に計一九票が投じられた。鳩山はこれについて、「やゝ意外な感じを受けた。吉田君の一派が中心となって白票を入れたということだが妙な人達だなと思った」との感想を残している[20]。この結果は自民党内が一致して鳩山を支持していなかっただけでなく、鳩山後の混乱を予感させるような結果となった。この日、芦田は自身の日記[21]に「当選した鳩山さんの挨拶を下から見ていると、何としても Kalta 会談の際の F. Roosevelt と同じように永くはないとの感じであった。壇上で代行委員の挨拶に出た三木武吉君も同じような表情。大野君が祝詞を述べた。これが精進〔新〕強力な保守党の三本柱かと思うとうたゝ感に堪えない」と記している。選挙後、鳩山後が加速し始める。石橋の『日記』にはこれ以後党内主要幹部達との懇談が頻繁となる。特に四月二三日には三木が、鳩山後は岸を候補と考えていることが書かれている。

十時三木武吉邸訪。作朝松村謙三氏来訪の趣旨により党内有力者の諮問機関組織をすゝむ。かれはいわゆる吉田派を絶対に排斥せんとす。またかれは鳩山の政権をできるだけ長く続け、岸に次代を譲ることを考慮す。

鳩山と一体といえる三木の言となれば、この時点で自身に鳩山後の芽はないと感じたとしてもおかしくはない。しかし、翌月五日に書かれた『日記』に注目すべき記述がある。それは、第一次鳩山内閣で厚生大臣をつとめた鶴見祐輔が鳩山後に石橋を推したというものである。

夜九時ごろ鶴見祐輔氏来談。本日同志と相談の結果、鳩山の跡目として私を推せん、このことを鳩山氏に進言し来りたりと報ず。

同日の鳩山の日記[22]にも「十一時、鶴見氏」とある。筒井は、『日記』の「同志」とされる人について、旧改進党系集団が石橋擁立の原動力となったとみている[23]。確かに改進党の松村、三木との交流が頻繁となり、これに鶴見、大久保留次郎や側近の石田博英も加わる形になり、彼らが総裁候補に石橋を推薦する意図が明白であるとの記述が見られるようになったことをみれば、筒井の見方は当を得たものとなる。このほか池田勇人のグループも最終的に石橋支持が明確となった。池田は、その追悼書[24]に「私の弟子・池田君」と題する石橋の序文が掲載されているように、第一次吉田内閣の大蔵大臣であった石橋が池田を事務次官に抜擢したことで政治家への道が開かれて以来、生涯にわたって精神的な紐帯を維持し続けた人物であった。こうして次第に総裁選に向けた石橋グループが形成されていく。

ただ、この年は日本にとっても石橋にとっても大きな問題が起こった。その一つは、七月に三木が死去したのである。大蔵大臣を希望していた石橋が通産大臣となった経緯に大きな影響を与えたとされており、三木の死去によって石橋が

総裁への階梯を登るための環境が大きく好転したことになった。次は電源開発総裁問題である。高度成長期が始まった当時の日本は慢性的な電気不足に悩まされており水力発電所を中心とした発電所建設が急務であった。多額のそれも長期にわたる工事であることやその建設場所を巡って政治的な問題に発展することは、現代から見ても容易に想像できる。このため国策会社である電源開発株式会社総裁人事に政治力学が働くことは当然ともいえる。筒井が「岸や河野などが石橋を追い落とすべく画策して、石橋の推した候補者が否決される結果となった[25]」と述べているように、八月二八日、岸や河野の推す内海清温が新総裁に就任した。石橋は自省所管であることから激しく反発したものの、翌月一一日に副総裁の藤井崇治を排除して岸田幸雄を就任させたことが精一杯の抵抗であった[26]。この問題の経緯を見れば、総裁選は既に水面下で進行していたことになる。

更にもう一つの問題が日ソ交渉である。前年から始まった交渉は五月に漁業条約の締結を見るに至ったが、領土問題が絡んだ平和条約交渉は膠着状態となっていた。自民党内からも交渉打ち切りを主張する声が上がるなど交渉継続は困難を極めていた。しかし、この問題は石橋にとって総裁への環境が更に好転する結果となったのである。それは、交渉そのものではなく、鳩山がこの交渉をまとめあげてこれを花道に引退すると表明したからである。八月三一日の『毎日新聞』は、財界の意向として交渉後の鳩山引退を求めるとの記事を掲載している。また、翌日の『朝日新聞』は鳩山の今秋引退を、『読売新聞』は九月二日に岸・石井会談で鳩山引退を承認したと報じている。しかし、これに先だつ八月一〇日『日記』に、鳩山が自己の引退について語ったとする記述がある。

十時閣議。終わりて軽井沢に赴く。六時ごろより鳩山別邸にて会談、岸、石井、河野、大野、三木（武夫）、私、根本官房長官参集。日ソ交渉問題結末後鳩山氏は隠退と決し、取りあえず後任総裁選任の方法を考究すべしとの結論。河野はその手段として内閣改造。総裁候補と認められる者の入閣を主張。石井氏等反対。東京にて続いて会合を催

（七五）

すことに話し合いて終了。

鳩山の日記には「五時より会議。石橋、河野、根本、大野、岸、石井、三木武夫の七氏」とあるが会議の内容は記されていない[27]。日記で見る限り、この日以降鳩山後すなわち新総裁選出に向けての政局が大きく動き出したことになる。

石橋の『日記』八月三〇日には、「四時すぎ、東洋経済にて大久保留次郎氏と会談。氏は石井氏と予との連合を説く」とあり、既に後の二位・三位連合に向けた動きが始まっていることをうかがわせている。また翌日は、「福田篤泰氏と会食。福田氏はいわゆる大野派なり、大野氏のため私との妥協を熱心に勧説す」とある。総裁選関連の動きが活発化している。九月に入ると、日ソ交渉問題と同時に総裁選の動きが一段と活発化する。九月五日の芦田の日記[28]には、自身が石橋に総裁選出馬を促している記述がある。

> 十時石橋君を東洋経済に訪ねて、「こゝ迄来たら君も決心するがよい。こんな内閣では日本はどうにもならぬ。信を内外に失うばかりだ。君も理想の通りハッキリものを言うがよい」と激励した。

同日の『日記』に「十時東洋経済にて芦田氏と会談、彼は私の奮起をうながす」とあり芦田の日記と一致した内容となっている。九月二〇日の『日記』には、「正午蘭亭にて三木武夫氏と会談。彼の意図、合せて松村謙三氏の意図明白、彼等は後継総裁として一致して私をおさんとす」とある[29]。いよいよ石橋周辺の主要な人物達が彼の出馬に向けて本格的に動き始めたことと、これを受け入れたことを示している。芦田は戦前から経済倶楽部講師としても石橋とは旧知であり、リベラリストと言われたように[30]石橋とは思想的に近しい人物であることは今更言うまでもない。

九月七日の『朝日新聞』には、注目すべき世論調査記事が掲載された。すでに指摘したように、次の首相として誰が

望ましいかの設問で、石橋は八番目にあたるわずか六人の支持を得たに過ぎなかった。これは一二月の総裁選挙前の人気投票としての性格もあり、その結果が自民党内における支持票と直接重なるかは疑問であるものの、著しい齟齬をきたしているとも考えにくい。要するに多くの国民からは、この時点においても石橋が宰相候補者とみられていなかったことになる。

第三章　総裁選の政治力学

一〇月になっても引き続き日ソ交渉問題は難航していた。しかし、一方で総裁選候補者三人がほぼ出そろったことが報道されるようになる。『読売新聞』は、一〇月一〇日の政界メモ欄に「熱が入り出した？総裁争い」と題する記事で、岸信介が大野伴睦邸を訪れたが、そのねらいは総裁選への支持を依頼したのではないかとする一方、石橋湛山は山梨、静岡の遊説に向かったがこれは総裁選工作ではないかとする記事を掲載する。また、同日石井光次郎が大磯の吉田茂邸を訪れて総裁選の支持を要請したのではないかとも報じている。他紙も同様に、いよいよ三人の候補のがそれぞれが総裁選に向けて動き出したことを報じている。

ところで、一〇月二七日の『日記』には驚きを禁じえない記述がある。それは、既に多数派工作のためにカネが動いていることをなげいているだけでなく、総裁選立候補を決断したことを後悔しているとも受け取れる表現である

朝日新聞に赴き仝社の希望にて、岸石井両氏と座談会、経済クラブに赴き新聞社と会見二、三、大久保留次郎、石田博英氏らと会談。総裁問題にて岸、石井両氏と相争う体勢となり、金銭まで散布するに至っては心外至極なり。あえて立候補したるわけにはなけれど、候補に推され〔た〕ことをむしろ辞退すべきにあらずやとも考えさせられる。

（七七）

石橋の心境を吐露したものとしてこれをどう評価するかである。権力闘争の凄まじい一面を垣間見て、これにひるんでいると見るか、或いはジャーナリストとして、経済専門誌出版社の経営者であった経験から、お金と密接に関わることを生業としてきたとはいえ、彼の思想・信条からすれば、政治的思惑のためにカネを使うことは考えられない意外なことと見たか、それとも政治家そのものに失望してしまったのか。筆者はその何れもが真であろうと考える。いわゆる清濁併せ呑むと表現される気質をそなえた政治家とは異質の人物とされる石橋にとっては驚くべき選挙戦と映ったのであろう。追放をはさんで足かけ一〇年を経過しても政治家に徹しきれない未熟さによって素人政治家の域を脱しきれない弱さを露呈してしまったことになる。

しかし、重要なのはそのことではない。その後一切弱気な言動は影を潜めたことを見れば、総裁候補に推挙された事をいわば天命として受け入れたのがこの時点であった。すなわち、四日後の『日記』一〇月三一日の短い記述にそれが顕れている。

> 河合良成氏の希望にて岸信介氏と河合氏宅にて会合、午前十時。しかしたゞ妥協の勧告を受けたのみにて他に何物もなし。

ここで、『新報』の総裁選関連記事を拾ってみたい。一一月一〇日号[31]に掲載された八人の政治家や評論家による匿名座談会形式の「今週の話題」である。この中で、政治評論家氏が事実上石橋と岸の二人の戦いとなっていることを見通している。

> 次期総裁レースには、石橋（湛山氏、通産相）、石井（光次郎氏、総務会長）、岸の三頭が出馬している。そのうち、

今のところ石橋と岸が有力だ。石井はもう圏外に去った感が深い。

刷り上がった『新報』が世間に出回ったのは、週刊誌の為この日付の約一週間前である。同じく『新報』一一月二四日号[32]に同様の記事がある。

外交評論家：公選になったら順位は？

政治評論家：一位岸、二位石橋、三位石井というのが常識だね。もっともこのごろは、石井が自分で票集めにのり出したそうだが…。だが、三人とも過半数はとれない。そうなると岸と石橋の決戦だ。その時石井の支持票がどちらに流れるかで、勝負がきまるわけだ。

これは言うまでもなく選挙前に発行されたものであり、結果として正しい情勢判断を下していたことになる。前号と同じ日付、すなわち『新報』の記事が出回った約一週間後になる一一月一〇日の中央各紙朝刊は、一斉に石橋が前日大阪出張の際の記者会見で総裁選立候補を言明したと報じている。

他の候補はどうであろうか。翌日の朝刊は石井が石橋言明前日の八日参議院での会合で立候補を表明したことを掲載している[33]。

しかし、岸は明確な立候補表明をしないまま選挙運動に突入している。ただ、一〇日夕刊に河野が総裁には岸が望ましいと発言した記事がある[34]。岸が態度を明確にしなかった理由の一つには、ギリギリまで公選によって新総裁を選出することが決まらなかったという事情がある。選挙をやれば選挙後に恨みを残すことになって党の運営に支障が出かねないと危惧する意見や、党を割ってでも実施すべきとの強硬な意見が対立していたため、決着をみるのに手間取ったから

（七九）

である。そこには、公選でなければ最有力の岸が選出されるとの岸陣営の思惑も働いていた。

石橋の側から見た選挙戦に戻るが、一一月一五日の『日記』には、どの候補者を支持するかをあいまいにしていた大野とも会合をもっており、多数派工作の様子がうかがえる。

> 午後五時花蝶にて東洋経済会合。右中座して招かれて倉石氏別宅にて大野氏と会合。彼は私に同調すること明白、たゞし位地等につき相当要求ある様子なれどよい加減にあしらう。

他方、緒方の急死によって派閥を引き継ぐかたちで総裁選に名乗りをあげた石井の回想録には、石橋と二位・三位連合について話し合った件がある。

> 公選は、昭和三十一年十二月十四日に決定されていたが、その少し前に、府中競馬場の近くの石橋正二郎君の別荘・鳩林荘で、パーティがあった。そこで石橋君と一緒になって、二人でぶらぶら歩きながら話す機会があった。どちらからいいだしたか覚えていないが、「今度の総裁選には、岸君と私ら三人で出ているわけだが、だれも過半数はとれそうもない。そうすると一位と二位の決戦ということになる。決戦になれば、君と僕のうち、最初の投票で上位になった者に、下位のほうが投票しようじゃないか　そうすれば多分勝つ。勝った者が総理になり負けた者が副総理になることにしようじゃないか」「それがよかろう」ということになって二人で握手した。(35)

総裁選直前の時期などを勘案すれば、石井の記述はほぼ真相を伝えていると解してよかろう。石橋の『日記』で、これに該当する記述は「石橋正二郎氏鳩林荘園遊会に赴く、妻同伴」とある一一月二三日の条である。したがって、この

時点で三候補者のいずれもが一回目の投票で過半数を獲得することはむずかしいとの情勢判断があったことになる。それは先に紹介した『新報』記事とも重なる。同時に、二位・三位連合の成立は、この情勢判断が正しければ、石橋・石井のいずれかが総裁に選出されることを意味していた。

石橋の『日記』一二月二日には「午前、松野鶴平、大野伴睦、林譲治氏をそれぞれ訪問、松野、大野両氏は石橋支援足ること明白、林氏も同調の様子、終わりて国際会館地下室にて昼食。夜、参議院議員のため柳橋田中家及び鶴の家。午後堤康次郎氏来、見舞持参」と選挙の前哨戦に明け暮れている状況が記されている。一二月八日には「大野氏一派、予支持に踏み切る」とあるように、選挙一週間前になってついに大野を味方につけることに成功した。大野は、当時『読売新聞』の番記者であった渡辺恒雄によれば、当初、三候補から距離を置くことで総裁選のキャスティング・ボートを握り、新政権誕生のイニシアチブをとるつもりであったという。したがって大野が石橋支持に踏み切ったのは、石橋本人には「しっくりとしないものを感じて」いたものの、石橋陣営から二位・三位連合の成立を伝えられ、「犬猿の関係」である石井よりは望ましいと判断した結果とみるのが自然であろう[36]。すなわち、大野が石橋に与したのは、石橋の党内基盤が脆弱であったことと相俟って、政権誕生後に自らの影響力を最大限行使できるとの計算によるものだった。

一四日に行われた総裁選一回目の投票結果は、岸二二三、石橋一五一、石井一三七となった。順当に行けば決選投票は石橋圧勝となるはずが、実際には石橋二五八、岸二五一と僅差の勝利となった。二位・三位連合の存在は事前に新聞報道されていたため[37]、岸陣営の切り崩しによって三〇人余りが連合から抜けたことになる。それが、すでに指摘した矢次の言う「大臣のポストの手形濫発」と「多額のカネ」が動いた結果であることは想像に難くない。

自民党総裁選挙はこうして石橋の勝利に終わった。最有力候補であった岸は、総裁選から四半世紀を過ぎた一九八二年、「やはり、石橋湛山さんの腹心であった石田博英さんにやられたということですか」との原彬久の質問に対して「まったくそうなんです」と答え、次のような見解を示している[38]。

（八一）

―　石田博英さんはそれほどまでに「石橋総裁」実現に際立った働きをされたんですか。

岸　そりゃあそうだ。彼が石橋陣営の総参謀でした。何といっても「ばくえい」（博英）君の力だろうね。八十％ぐらい、いや百％といってもいいくらいだ。

この見解は、「石橋の勝利は石田博英の際立った辣腕のためだ。あれ程有能に働いた人間もいないだろう。同時に岸の敗因の一つは自陣営のある政治家の票の読み違いである」との矢次の評[39]とも一致する。ちなみに「票の読み違い」は、図らずも二位・三位連合の切り崩しに大臣ポストの手形が濫発され、多額の金が動いたことを例証している。

確かに多くの論者が指摘しているように、石田が石橋の勝利に貢献したことは間違いない。しかし、それはあくまで選挙戦略上の問題にすぎない。総裁選直後の『新報』一九五七年一月五日号に掲載された、選挙の総括と今後の石橋内閣のあり方を論じた匿名座談会は、石橋擁立の功績を石田ではなく三木に帰している[40]。

外交評論家：石橋擁立は石田の功績か。

政治評論家：いや、それは三木武夫（新幹事長）だ。これが参謀総長だし第一の殊勲者だ。

戦後の石橋は一貫して、米欧だけなくソ連や中国などアジア諸国との平和主義的自主外交の理念を掲げ、経済運営にあたっては自由主義的な小さな政府を志向していた。この石橋の考えに最も近かったのは、石橋を筋金の入った自由主義・民主主義・平和主義者で国際主義者と認め、「石橋のリベラリストとしての思想や石橋の人柄に共鳴した」と竹内桂が分析している[41]ように、選挙戦の早い段階から旧改進党勢力の大方をまとめて石橋陣営の核となり、二位・三位連合を有効に機能させた三木であった。三木自身の言葉を借りれば、私は思想的には、稀代のリベラリスト、エコノミスト、

ジャーナリストと言われた石橋氏の思想に近く、また「派閥」というものを殆ど持たないながらに、総裁として推されたこの人物に魅了されていた」のである。[42]

両者の共通性をもう一つ挙げるなら、金に対して潔癖なところであろう。石橋が金権選挙に拒否反応を示したことはすでに指摘したとおりであるが、田中角栄内閣の跡を継いだ三木が金権政治の打破を訴えて公職選挙法と政治資金規正法改正をはじめとする政治改革に執念を燃やしたことも周知のことに属する。したがって、岸がその集金力を生かして選挙戦を戦ったことは、むしろ反岸派連合の結束を高め、かえってマイナスに作用したとの推論も成り立つ。

そもそも三木は、岸に対して、そのA級戦犯容疑者という経歴に嫌悪感を抱いていた。[43]原の評価にあるように、岸が「日米開戦の意思決定に関与したことは否定できない」。[44]そのため彼は、最終的に不起訴になったものの、戦犯容疑者として巣鴨拘置所に三年半拘留されたのである。岸は一九二〇年東京帝大法学部を卒業したが、将来は政治家志望であり、これからの政治の実態は経済であるとして農商務省を選択した。[45]したがって、明らかにマルクスの影響がうかがえるという意味でも、石橋や三木とは対極に位置していたことになる。一九二五年に分割された商工省に配属され、一九三六年から革新官僚として星野直樹などとともに満州国の経営にあたった。岸は、この満州時代に、いわゆる「弐キ参スケ」と言われたように、軍はもとより政財界などに広範な人脈を築いた。原は、こうした岸の一連の行動について、「日本が政治、経済において国家統制を強めつつ軍国体制を固めてゆくその軌道と完全に符合しているということである」と断じている。[46]

岸は自己の開戦詔書署名について重光葵を引き合いにして自己を弁護している。[47]彼がこの程度の弁解で済むと思ったのは、保守合同の中心的人物としての功績が前歴を償って余りあると自負していたか、そもそも悔いていなかったからであろう。しかし、三木のみならず、参議院自民党の木村篤太郎ら七〇人が一一日正すぎ帝国ホテルに集合して「岸幹事長は太平洋戦争の開戦の責任者でもあり、また最近の党内混乱の責任者でもあるから次期総裁には不適格である」と

（八三）

の意見が多く出たため、一四日の党大会では岸氏以外の人を総裁に推すとの申し合わせを行ったように[48]、岸の過去を問題視するむきは党内に多かった[49]。それは、石橋のもとに反岸勢力を結集させる大きな要因となった。こうして、日本が再出発するに際してふさわしい首相は、開戦の意思決定に関与した最有力候補の岸ではなく、その対極に位置する石橋であるとの結論が導かれるに至ったのである。

おわりに

一九五六年一二月の総裁選の焦点は、最有力候補の岸に対して石橋陣営がどれだけ反主流派を糾合できるかであった。石橋が僅差とはいえ当選に必要な票数を確保できたのは、岸の開戦の意思決定に関与したという前歴が、彼を最有力候補に浮上させた最大の理由である保守合同に対する功績をもってしても、拭い去れるものではなかったことを示している。

升味準之助は、派閥について、「それぞれ最も有利と思われる戦略地点を求めて合従連衡する[50]」ものと評している。確かに、結党間もない自民党が自由党・民主党・改進党といった旧党の野合状態から脱却しきれておらず、所謂「七個師団三連隊[51]」の群雄割拠の時代であったことは、石橋に有利に働いたことは間違いない。しかし升味の見解は、この総裁選に限っていえば、本論文がこれまで明らかにしてきたように、大野伴睦については当てはまっても、三木や池田、さらには岸の開戦責任を問題視した多くの人々の投票行動には当てはまらない。

このことは同時に、当時の自民党が開かれた政党であったことを示している。石橋・岸・石井の三人は、大臣経験はあるもののわずか数年程度の政治家経験しかもたなかった。このうち石橋と石井は、岸が官僚出身で民主党結党以来、主流派を歩んできたのに対し、その前歴がジャーナリストで、党人派でも官僚系でもない傍流に位置していた。もちろ

ん三人ともに今日のいわゆる二世議員でもなかった。総裁選が派閥や金の力ではなく、候補者の人となりや政策がものをいう選挙となった所以である。結党当時の自民党は、三木の行動に端的に示されるように、リーダーをその政治的な理念や人物本位で選択をすることが可能であった。したがって石橋の総裁選出は、表面上は派閥の合従連衡の結果だったとしても、単なる野合とは異なるものであったのである。

自民党総裁選の半年前、昭和三一年度経済白書は、「国民所得は、戦前の五割増の水準に達し、一人当たりにしても戦前の最高記録昭和一四年の水準を超えた。工業生産も戦前の二倍に達し、軍需を含めた戦時中の水準をはるかに上回っている」としながら、「幸運のめぐり合わせによる数量景気の成果に酔うことなく、世界技術革新の波に乗って、日本の新しい国造りに出発することが当面喫緊の必要時ではないであろうか」と問いかけ、もはや戦後ではなく「異なった事態に当面しようとしている」との現状認識を示している[52]。白書は、戦後日本の生きる途を軍需に拠らない技術立国に見いだしていた。すなわち、この白書は、「もはや戦後ではない」という単なる経済指標に基づく復興宣言ではなく、戦前との決別を宣言するものであったのである。

資源に乏しい日本が技術立国とその下で営まれる加工貿易に活路を見い出そうとするなら、戦前の帝国主義に頼ることがもはや不可能である以上、戦前には「小日本主義」を掲げてこれに異を唱え[53]、戦後は平和・国際主義を標榜し、通産大臣として民需の拡大を企図した経済運営を行った石橋こそが、日本の指導者として最もふさわしい人物であったはずである。この政権与党の選択は、石橋内閣組閣直後の『朝日新聞』の世論調査で、鳩山一郎内閣組閣時の四〇パーセント[54]、岸内閣組閣時の三三パーセント[55]をいずれも上回る四一パーセントが内閣の成立をよかったとし[56]、よくなかったとする一一パーセントを大きく上回っていたように、国民の支持を得たのである。石橋内閣成立の歴史的意義とは、このように日本が戦後の再出発にあたって、国際主義に基づく平和的自主外交を掲げる石橋という人物を選択したことにこそ求められる。

（八五）

総裁選後に国会で首班指名を受けた石橋は組閣に取りかかる。しかし、石橋後を見据えた岸や各派閥の駆け引きに翻弄されて組閣が難航したため、石橋は当初全閣僚を兼任する形で認証式に臨まざるを得なかった。その後、池田は大蔵大臣として入閣を果たしたものの、石橋・石井間で二位・三位連合の合意が成立した際の「負けた者が副総理になる」との約束は、派内の事情もあって石井が入閣しなかったため、反故にされる結果となった。また三木も、党内調整のために幹事長に起用されたことから、入閣しなかった。これらの結果、特定の国を意識しない外交を推進するとして外務大臣に起用した岸が、石橋の意向を尊重した三木の助勢もあってスムーズに首相の座を継ぎ、安保改定を果たしたことは、皮肉な巡り合わせであった。

こうして苦心の末、一二月二三日に成立した石橋内閣は、当日の初閣議後に石田博英官房長官による総理談話で積極経済と自主外交が新政権の政策上の柱であることを宣言した[57]が、派閥の力学と総裁選の論功行賞が複雑に絡みあった組閣によって、先行きに不安を残す船出となった。その後、石橋は不自由な身体で日中・日ソの友好促進のために身命を賭すこととなったが、これについては、今後の研究課題としたい。

注

（1）戦時下の石橋とその研究史については拙稿「石橋湛山研究――小日本主義とその後の石橋湛山――」を参照のこと。

（2）代表的な研究として、姜克實『石橋湛山の戦後』（東洋経済新報社、二〇〇三年）、上田美和『石橋湛山論――言論と行動』（吉川弘文館、二〇一二年）、増田弘『石橋湛山――思想は人間活動の根本・動力なり』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）がある。

（3）原彬久編著『岸信介証言録』（毎日新聞社、二〇〇三年）一〇三頁。

（4）「鳩山内閣を支持するか」『朝日新聞』一九五六年九月七日。この記事では、「つぎの総裁にはだれがよいとおもいますか」

との質問に対し、一四九人が岸をあげ、以下、重光六三人、河野五二人、吉田四二人と続き、「このほか一応名前をあげられたもの」として石井を支持したのが一四人で五番目、石橋にいたってはわずか六人で八番目にに過ぎなかった。

（5）鳩山一郎『鳩山一郎回顧録』（文藝春秋新社、一九五七年）一四三頁。
（6）『読売新聞』一九五四年一二月一〇日夕刊。
（7）石田博英『私の政界昭和史』（東洋経済新報社、一九八六年）八〇頁。
（8）石田博英『石橋政権・七十一日』（行政問題研究所、一九八五年）一一〇頁。
（9）筒井清忠『石橋湛山――自由主義政治家の軌跡――』（中央公論社、一九八六年）二九九～三〇〇頁。
（10）岸信介『岸信介回顧録』（廣済堂出版、一九八三年）一二六頁。新党四人組は会長に金光庸夫、総務岸、組織石橋、政策芦田の常任委員で構成される新党協議会を発足させて彼らを中心として反吉田の全国遊説を開始した。
（11）『読売新聞』一九五四年一二月一九日。
（12）チャーマーズ・ジョンソン、矢野俊比古訳『通産省と日本の奇跡』（ティービーエス・ブリタニカ、一九八二年）二五〇頁。
（13）通商産業省通商産業政策史編纂委員会編『通商産業政策史』第5巻（通商産業調査会、一九八九年）一一八頁。
（14）チャーマーズ・ジョンソン前掲書、二五七頁。
（15）『朝日新聞』一九五五年三月三〇日。
（16）筒井前掲書、三一八頁。
（17）鳩山前掲書、一六四頁。
（18）河野一郎『河野一郎自伝』（徳間書店、一六五年）一一七頁。この逮捕について彼は、内務官僚による悪質な選挙妨害であったと記しており、控訴審では無罪となった。
（19）筒井前掲書、三二四頁。
（20）鳩山前掲書、一八三頁。
（21）芦田均『芦田均日記』第六巻（岩波書店、一九八六年）一一三頁。

（八七）

(22) 鳩山一郎・薫『鳩山一郎・薫日記』下巻（中央公論新社、二〇〇五年）二五四頁。
(23) 筒井前掲書、三三一頁。
(24) 発行人松浦周太郎・志賀健次郎『池田勇人先生を偲ぶ』非売品、一九六七年。
(25) 筒井前掲書、三三五頁。
(26) 石橋湛山『石橋湛山日記』下（みすず書房、二〇〇一年）八一三頁。
(27) 鳩山一郎・薫前掲書、二八四頁。
(28) 芦田前掲書、二〇〇頁。
(29) 前掲石田『石橋政権・七十一日』一二二頁。「昭和三十一年三月、旧改進党グループを率いる三木武夫氏が「石橋擁立でいこう」と申し出てくれた」とある（一二二頁）。三木が選挙戦の早い段階から石橋支持を表明していたことは石橋の日記からも明らかである。しかし、翌月に行われた第一回自民党総裁選で鳩山が選出されたことや同年八月に鳩山の引退意向表明がなされたことなどを考えれば、石田が言う三月の支持表明には疑問符がつく。
(30) 宮野澄『最後のリベラリスト・芦田均』（文藝春秋、一九八七年）。上田美和『自由主義は戦争を止められるのか』（吉川弘文館、二〇一六年）。一三～七八頁。
(31) 『東洋経済新報』一九五六年一一月一〇日号（通巻第二七五三号）。
(32) 同右、二四日号（同第二七五五号）。
(33) 『読売新聞』一九五六年一一月九日。
(34) 同右、一〇日。
(35) 石井光次郎『回想八十八年』（カルチャー出版社、一九七六年）四〇五～四〇六頁。四〇六頁には「石橋湛山氏、松野鶴平氏とともに（昭和31年11月、鳩林荘で）」の注釈がついた石井・石橋・松野の三人が石橋を中心として並んだ写真が掲載されている。
(36) 渡辺は大野について、「岸に対しては、岸―佐藤の兄弟連合軍が政権をとれば、官僚政権となり、官僚政治が復活するとい

う点を恐れていたし、石井とは犬猿の関係にあったし、石橋に対しても、旧改進党の三木武夫、松村謙三という政党経歴も思想も大きく違う実力者がいち早くその傘下に入っているという点でしっくりしないものを感じていた。そこで大野は、この三者の争いに超然としてキャスティング・ボウトを確保し、次の政権誕生にイニシアチブをとろうという構え」をとったと述べ（渡辺恒雄『派閥――保守党の解剖』〈弘文堂、二〇一四年、初刊は一九五八年〉一二五頁）、大野の石橋支持の背景に石田と大野派幹部倉石忠雄との取り引きがあったとみている（同『政治の密室』〈雪華社、一九六六年〉三一頁）。

（37）『朝日新聞』一九五六年一二月一〇日。『読売新聞』一九五六年一二月一一日。

（38）前掲原『岸信介証言録』一〇二頁。

（39）同右、一〇三頁。岸とほぼ同時期にあたる一九八一年六月の原のインタビューに答え。

（40）『東洋経済新報』一九五七年一月五日号（通巻二七五九号）。

（41）竹内桂「三木武夫と石橋湛山――石橋内閣期を中心に――」（『自由思想』第一四一号、石橋湛山記念財団、二〇一六年五月）二四頁。竹内は、三木が石橋を擁立したもう一つの要因に二三歳年長の石橋に父親の久吉を重ね合わせていたことを挙げている（同）。

（42）三木武夫『元総理三木武夫議員五十年史』（日本國体研究院、一九八七年）二四六頁。

（43）後年、三木は、「各主力新聞が社説でもって、われわれはA級戦犯（ママ）を総理大臣にするわけにはいかないと、筆をそろえて書いたとすれば、岸内閣は生まれなかったかもしれないな」と嘆じている（前掲竹内論文二四頁）。

（44）原彬久『岸信介――権勢の政治家――』（岩波書店、一九九五年）一三七頁。

（45）前掲原『岸信介証言録』三四九頁。

（46）前掲原『岸信介』三七頁。

（47）『毎日新聞』一九五六年一〇月二八日。

（48）『朝日新聞』一九五六年一二月一一日夕刊。

（49）たとえば、後藤田正晴は、「僕は個人的には、戦犯容疑で囚われておった人が日本の内閣の首班になるというのは一体どう

（八九）

したことかという率直な疑問を持ちました」と回想している（『情と理――後藤田正晴回顧録』上〈講談社、一九九八年〉一七二頁）。また、中曽根康弘も「私としては大東亜戦争に行って随分部下も殺した。また弟も戦死した。それらを考えると岸さんが総理大臣になるのは早い。むしろあの時、軍とやりあった石橋湛山氏を総理にするのが筋だという気持ちがあって投票した」という（服部龍二『中曽根康弘』〈中央公論新社、二〇一五年〉七一頁）。

(50) 升味準之輔『戦後政治　一九四五―五五年』下（東京大学出版会、一九八三年）四七八頁。

(51) 石田『石橋政権・七十一日』一一八～一二一頁。石田は旧民主党系の石橋、河野、岸、松村と三木、芦田、北村徳太郎、大麻の派閥を七個師団、旧自由党系の石井（旧緒方）、大野、旧吉田（池田、佐藤）の派閥を三連隊とそれぞれ名付けている。

(52) 経済企画庁編『昭和31年度経済白書――日本経済の成長と近代化――』（至誠堂、一九五六年）四二～四三頁及び同書所収の「経済白書発表に際しての経済企画庁長官声明」。

(53) すでにこの時点で、石橋は「其資本を豊富にするの道は、唯だ平和主義に依り、国民の全力を学問技術の研究と産業の進歩とに注ぐにある。兵営の代りに学校を建て、軍艦の代りに工場を設くるにある。陸海軍経費約八億円、仮に其半分を年々平和事業に投ずるとせよ。日本の産業は、幾年ならずして、全く其面目を一変するであろう」と技術立国としての日本の方向性を示していた（「大日本主義の幻想」一九二一年八月一三日号（通巻第九六一号））。

(54) 「どの政党を支持するか」『朝日新聞』一九五五年一月二〇日。

(55) 前掲『朝日新聞』一九五七年三月一八日。

(56) 「石橋内閣をどう見るか」『朝日新聞』一九五六年一二月二九日。

(57) 前掲石田『石橋政権・七十一日』一五六頁。内閣は、閣僚名簿と総理談話を掲載した一二月二四日付の『読売新聞』が「石橋派閥連合内閣の成立」と題する社説を掲載したように、派閥均衡内閣となっただけでなく、防衛庁長官が各派閥の反対から任命に至らなかったため、僅か二カ月で石橋・岸・小瀧彬と三人が順に就任（石橋、岸は兼任）するなど混乱を極めた。